

## 序論

今日においてインターネットは私たちの生活に大きな影響を与えている。日本国内の利用者数は毎年増加している。便利なツールとして活躍する一方で、若い世代を中心にインターネットから多くの悪影響を与えられているとする意見もある。そこで本研究では、事件を起こしてしまうほど大きな影響をインターネットから受けているのかを調べるために、インターネット上での行動が攻撃行動にどのように関わっているのかを調査・実験し、どのように関わっているのかを明らかにすることを目的としている。

## インターネットと心理的な関わり

心理学が注目してきているのは、Computer-Mediated Communication(略して CMC)行動である。この行動は対面せずともとれる、新しいコミュニケーションの方法であったからである。これは、普段の対面した状態では起こさないような行動を CMC 行動では起こしたりする。つまり、それを利用する人の行動、性格などを大きく変化させる可能性があるからだと考えられている(坂本 2000)。

その可能性から、インターネット上で心理療法がおこなわれている。メリットやデメリットなど改善の余地は多々あるが、事例研究が進んでいけば進歩していきだろうといわれている。他にも、対人行動の強化をもたらしたことや、逆に人間関係の希薄化を招いた、という事例も確認されている。

つまり、いまだに調査・研究がなされている分野だということである。

## 先行研究について

インターネットと攻撃性の関係について

高比良ら(2006)の研究である「インターネット使用と攻撃性の関係」では中学生を対象に縦断調査を行い、因果関係を推定するという研究である。

その結果、ウェブなどの閲覧などによる攻撃性への影響はみられず、CMC 行動による影響が見つけられた。しかし、その結果も攻撃性が高く社会適応できなかったために CMC 行動で攻撃的になったと考えられた。

また、実験での攻撃行動については、ユン(2008)の CMC で笑ったり微笑んだりする表現を使うことによって、話し相手は相手にも同じような感情を催す。という研究から実験時の行動のコントロールを考えた。

## 調査・実験

この研究では質問紙による調査で、インターネットと攻撃行動との関連を明らかにすると同時に、チャットを使った実験をすることで直接の因果関係を明らかにする。

## 目的

この研究では、インターネットの使用目的や時間、使用を始めた期間と社会的スキルの高さなどが攻撃行動に関連しているのかを明らかにすることを目的としている。

この研究を進めるうえでの仮説は以下の通りである。

- ・ 仮説 1 インターネットの使用期間が長い人は、攻撃性が強い。
- ・ 仮説 2 インターネットの使用量が多い人は、攻撃性が強い。
- ・ 仮説 3 インターネットの使用目的によっては、攻撃性が強くなる。
- ・ 仮説 4 社会スキルが低い人は、攻撃性が強い。

## 使用尺度

日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 安藤ら(1999)

KISS-18 菊池(1988)

尺度以外の質問項目にインターネットの使用目的と使用量を尋ねる項目を設問

分析方法として t 検定と分散分析、相関分析を行った。以下は、相関分析の結果である。

下位尺度ごとの相関係数

	敵意	身体的攻撃	言語的攻撃	使用時間	Kiss-18	使用期間
短気	0.525***	0.442***	0.231*	0.199*	-0.056	0.027
敵意		0.358***	0.07	0.179	-0.098	0.161
身体的攻撃			0.037	0.62	-0.078	0.024
言語的攻撃				-0.014	0.487***	0.26*
使用時間					-0.039	0.129
Kiss-18						0.146

\*:p<0.05    \*\*:p<0.01    \*\*\*:p<0.001

## 実験

実際にチャットを行い、そのときの感情の変化を測定する。測定尺度として、日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙を使用した。実験時の仮説は次の通りである。

仮説 5 不快な行動をしたときの攻撃性質問紙の結果は敵意・言語攻撃性の項目の得点が上昇し、それによって全攻撃性の得点も上昇する。

実験を A 群と B 群に分けて行い、どちらの条件が攻撃的行動に影響を与えるかの差異を明らかにする。

実験 A 群	実験 B 群
条件;被験者はチャット相手の情報を知らない状態でチャットを行う。	条件;被験者がチャット相手の情報を知っている状態でチャットを行う。
1、 相手が不快な行動をする	1、 相手が不快な行動をする
2、 相手が友好的な行動をする	2、 相手が友好的な行動をする

## 結果

調査では、言語的攻撃がそれぞれの分析で、有意な差を見ることが多かった。

実験では、攻撃性尺度全体で見えていくと、A 群 B 群の間に差異はあまり見られなかったが、下位尺度の得点で比較していくと差異を見ることができた。特に言語的攻撃では、A 群の 1 グループでは上昇が、B 群の 2 グループでは下降が大きく見ることができた。

## 考察・結論

本研究では実験と調査を行い以下の仮説の立証を試みた。

仮説 1 インターネットの使用期間が長い人は、攻撃性が強い。

仮説 2 インターネットの使用量が多い人は、攻撃性が強い。

仮説 3 インターネットの使用目的によっては、攻撃性が強くなる。

仮説 4 社会スキルが低い人は、攻撃性が強い。

仮説 5 不快な行動をしたときの攻撃性質問紙の結果は敵意・言語的攻撃の項目の得点が上昇し、それによって全攻撃性の得点も上昇する。

以上のうち 1~3 はすべてではないが、立証することができた。しかし 4 は有意な関係が見られなかった為、棄却された。しかし、社会スキルと攻撃性には弱い負の相関関係があったことは考察の余地があると考えられる。これらからインターネットの使用目的が問題なのではなく、インターネットでの行動によって攻撃性が変化すると考えられる。また、この攻撃性は主に言語的攻撃性であり、kiss-18 と正の有意な相関をしていたことから問題解決スキルとしての攻撃性であると考えられる。

そして 5 の仮説は、言語的攻撃については、立証することができた。今回はチャットのみであったが、他の行動も組み合わせるとさらに違う結果になるだろう。

## 文献

小林久美子ら 坂元章(編) 2000 インターネットの心理学 学文社

パトリシア・ウォレス 2001 インターネットの心理学 NTT 出版株式会社

A.N. ジョインソン 2004 インターネットにおける行動と心理 北大路書房